

1. 新事務局から

事務局は2000年4月から3年間、大阪大学言語文化部に置かれていましたが、2003年4月より慶應義塾大学に移転しました。住所・所属機関等の変更があった場合は従来どおり、電子メールあるいは郵便にて、すみやかに事務局までご連絡下さいますようお願い致します。新事務局の住所と電子メール・アドレスは以下の通りです。

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

慶應義塾大学 来往舎内

日本フランス語学会事務局

sjlf-jimuアットマークhc.cc.keio.ac.jp

本年度あるいは過去年度の会費をまだ納入されていない方は、下記の郵便振替口座に振込をお願いします。

郵便振替口座番号 00160-6-56308

2年以上会費を滞納された方には、学会誌『フランス語学研究』はお送りしていませんのでご注意ください。なお、『フランス語学研究』のバックナンバー購入希望の方は、フランス図書に販売を委託していますので、直接同書店にお問い合わせ下さい。

フランス図書：〒160-0023 東京都新宿区西新宿

1-12-9 tel. 03-3346-0396

e-mail: frbooksアットマークsepia.ocn.ne.jp

日本フランス語学会の例会は4月から12月まで（8月は除きます）、原則として毎月第3あるいは第4土曜日、15時～18時、早稲田大学（2003年度）で開催されます。例会の案内は学会ホームページ（<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/home.html>）、メーリングリスト「フレンチリング（f-lingアットマークfrench.lang.osaka-u.ac.jp）」の他、「言語」（大修館）、「ふらんす」（白水社）で通知しておりますので、御覧下さい。

2. 旧事務局から

現在、事務局は3年で交替という形で運営しています。大阪大学で事務局を引き受けて、この3月で3年がたち、仕事を新しい事務局の慶應義塾大学に引継ぎ、われわれ大阪大学のスタッフはやれやれという気持ちです。事務局は、出来るだけ、複数の学会員がいる大学にお願いするようになっていきます。大阪大学では井元、三藤、春木という3人の学会員が同じ部署に所属していますので、連絡等仕事はやりやすかったと思います。途中、春木が学会誌の編集責任を兼務したり、井元が文部省の在外研修で約1年アメリカに出かけて留守をしたりということもありましたが、3人体制だったおかげで何とか支障を来すことなく事務局を務めることが出来ました。

事務局を交替するに当たって、3年間の経験をもとに学会員みなさんに事務局の仕事がどのようなものであるか、少し紹介させて頂きたいと思います。どんな仕事もそうですが、自分たちでやってみて初めて、これまでにこの仕事をされてきた方々の苦労が理解できました。

学会員の方々からの問い合わせの中には、まるで事

務局に専属の職員でもいるかのように思っておられるようなものもあり、今後事務局をしていただく人たちのためにも、少し事務局の実態を紹介して学会員みなさんに理解していただく必要があるのではないかと思います。

事務局の一番大きな仕事は、春の仏文学会のおりに行うシンポジウムと例会の時に、スタンドを出して、会費を徴収してBELF最新号、ニューズレター、会計報告を会員みなさんに配布することです。結構大きなお金を扱い、会費納入の記録を間違わないようにしなければいけないので、このときが一番神経を使うときです。また、受付のための机やイスの手配、アルバイトの学生さんの手配など、開催校の学会員や時には学会員以外の先生にもいろいろとお世話になりますが、ある時など受付の場所をめぐって、お世話下さった先生とその大学の他の研究室の先生とがもめかけて、こちらが冷や冷やするなどということもありました。

受付はアルバイトの学生さんと事務局スタッフで対応するのですが、会の始まる直前の時間に受付が集中するので、会費納入記録のリストや領収書など、事前の準備にも気を使います。BELF最新号は学会の直前にできあがるのが常ですが、会場に、少な過ぎず、かつ多過ぎない部数を搬入してもらうのが頭の使いどころです。というのも、搬入から当日までおよび会期中のBELFの保管と、終わってから余った部数を事務局に送り返す作業などに頭を悩ますからです。特に、我々のように事務局が関西にある場合は、いっそうこの問題が深刻になります。毎回、BELFの受け入れと保管には当該大学におられる学会員の方々にお世話になってきました。幸い、昨年度は搬入したBELFは不足することもなく会場ですべて捌け、見通しの良さを事務局のスタッフ一同、自画自賛した次第です。

会場に来られなかった学会員の方へのBELF等の送付も大きな仕事です。仏文学会の会場に来られなかった方々や、図書館などの会員に送付するのですが、かなりの数なうえ、会費の振り込みのために、未納の年数に応じた金額を記入した振り込み用紙を同封したりしなければいけないので、毎年、作業は、授業が終わって時間ができる夏休みに入ってからになってしまいます。学生さんや院生さんにアルバイトをお願いして作業をしますが、各封筒の端をはさみで切って開封にする作業など、案外面倒なものです。

日常的には、学会費の振り込みの連絡が郵便局から来るので、そのたびにきちんと記録すること、住所変更等の連絡があるたびに名簿の変更をするだけでなく、それを例会等の郵便物による案内の発送を担当している係に連絡しなければいけません。また、学会誌の販売を委託しているフランス図書から、何号を何冊送ってくれ、という連絡があれば、それにも対応しなければいけません。他にも学会員からのメールや電話による様々な問い合わせや、図書館関係からの問い合わせなどもあります。それ以外にも、ホームページのリンク先等、国際学会の後援依頼など、いろいろな連絡

があり、そのたびに編集責任者や編集委員の方々と相談のうえ、対応しています。今は編集委員会のメーリングリストがあるので、緊急の相談などにもすぐに対処出来るようになりました。

さらに、投稿希望を付けて編集責任者へ連絡すること、投稿原稿の受け取り、論文目録や修士・博士論文目録への掲載希望の受付とその原稿作成などという仕事もあります。(なお、論文目録への掲載希望の方は、くれぐれも論文そのものを送られることのないようにお願いします。)他にも会計関係などの細かい仕事もありますが、以上が事務局の仕事のあらましです。

現在、事務局関係での懸案事項は、BELFのバックナンバーの保管場所です。事務局移転のたびに、保管書類やBELFのバックナンバーを宅急便で事務局を引き受けた大学に送るのですが、今回は段ボール箱で19個になりました。今後も増えるばかりだと思われます。個人の研究室に置くには限界があります。解決方法を考える時だと思います。

慶應義塾大学の編集委員の方々、これから3年間、よろしくをお願いします。(春木仁孝)

3. 運営・企画担当より

運営・企画担当は毎月の例会、特別例会、シンポジウムなどを企画しています。2003年度は前年より引き続いて前島、渡邊(以上関東)、大木、木内(以上関西)が担当します。

2002年度はシンポジウム「言語とのジェンダー：フランス語と日本語のばあい」(6月2日、東京外国語大学)が開催されました(『フランス語学研究第37号』の「誌上シンポジウム」を御覧下さい)。今年は日本フランス語フランス文学会春季大会において「語りのストラテジー」のタイトルで開催されます(5月31日(土)10時45分-12時45分、独協大学)

その他の例会について、2002年度は『フランス語学研究第37号』の「例会報告」を、2003年に関しては次項を御覧下さい。

例会発表は毎月、多数の参加者を得て活発に行われています。従来討議されて来た現代フランス語の統辞論・意味論の問題に関する、最新の内外の研究成果を踏まえた発表のほか、個々の表現や構文に対して新たな視座を提供する研究、フランス語と日本語などの対照言語学的研究も目立つようになりました(他方、音韻論や古フランス語など現代語以前を対象に含めた発表はやや少ないようです)。皆様の御協力により、今後ともより一層、多様なテーマを取り上げて行けたらと思います。

例会は発表者が研究の結果・過程を報告するだけでなく、参加者が未知の問題や視点に接することで様々な刺激を得る機会でもあります。会員の皆様が今後も例会に積極的に参加されるよう、お願い致します。

例会、シンポジウムなどに関してアイデアをお持ちの方はご遠慮なく運営・企画担当にご連絡ください。

(K.M.)

3. 編集委員のプロファイル

編集委員会のメンバーは毎年数名ずつ交代する制度になっています。これは『フランス語学研究』の奥付に載っている編集委員のリストで確認ができますが、今回のニューズレターでは2002年度に新たに編集

委員となったメンバーに簡単な自己紹介をお願いします。

~~~~~

西村牧夫(西南学院大学)

語学会の編集委員会は私にとって遠い存在でしたが、畏敬するH氏をはじめとして無償の活動を続ける皆さんの姿には頭の下がる思いでした。今回、違和感を感じつつも編集委員会に加わったのは、少しでもお手伝いできたらという気持ちからです。

私が言葉を考察することの楽しさを知ったのは東京外国語大学の卒論でジェロンディフを扱ったときです。Grenoble大学のYves Le Hir先生(文体論)にたどたどしいフランス語で質問状を出したところ丁寧な返事をいただき感激したことは忘れられない思い出です。修士在学中にパリに留学、RichelieuとCorneilleを軸に17世紀初頭のフランスの変化を研究するはずでした。しかし、幸い(?)指導教授がアメリカの大学へ移り、お陰でのびのびと3年間を過ごすことができました。

福岡の西南学院でフランス語を教えるようになってから自分の無知を再認識し、自己流で勉強しています。その間、朝倉季雄先生から激励のお手紙をいただいたり、東京の大学院生から私の論文が参考になったという嬉しい便りが届いたりもしました。それが少しはやる気を出すきっかけとなったかもしれません。今、その時の院生A氏と委員会で同席できるのも大きな喜びの1つです。

~~~~~

山田博志(筑波大学)

早いもので、私が言語学の勉強を始めて30年近くになります(先日、人生何度目かの大台を迎えました)。言語学に興味を持つきっかけのようなものが特にあったわけではありませんが、強いていえばグリーンソン(H.A.Gleason)の『記述言語学』とソシュールということになるでしょうか。それに70年代は大修館の『言語』が創刊され、様々な言語学関係の本が翻訳、出版されるなど、言語学が脚光を浴びていた時代でした。今はもうありませんが、筑摩書房から出ていた『言語生活』も懐かしい雑誌です。

でもそれらに劣らず強い印象を残しているのは、実はこの学会(正確には前身の「フランス語学研究会」)の例会なのです。大学院生に成り立ての頃、まだ学会員になってもいないのに、東大駒場の木造の建物で行われていた例会に何度か顔を出したことがあります。そこで行われていた研究発表とその後の質疑応答は、片隅で聞いているだけの私にとっても極めて刺激的でした。高名な先生方のお顔を拝見して感じた知的興奮(?)も忘れられない思い出です。

例会が行われるのは地域的に限られているため、東京近郊と関西以外の方々に不便をおかけしていることを申し訳なく思っています。それでも活字やネットを通してではなく、実際に顔を合わせることで得られる情報は多いはずで、会員数が300名を超す学会で例会の出席者が30前後というのは、多いと見るべきか少ないと見るべきか分かりませんが、この30人の顔ぶれが固定してしまわないよう、毎回少しずつでも新しい方が参加して下さることを願っています。

~~~~~

喜田浩平(慶應義塾大学)

現在 慶應義塾大学文学部言語学専攻の初級フランス

ンス語や仏文学専攻の学生向けのフランス語学入門の授業などを担当しています。専門はフランス語学で、特に意味論と語用論が交叉する領域の問題に関心を持っています。

京都大学大学院の博士課程在学中にフランスに留学し、国立社会科学高等研究院 (E.H.E.S.S.) でOswald Ducrot教授の指導の下に学位を取りました。テーマは「条件文の非真理条件的意味論」です。条件文 (Si P, Qという形で、「もしPならQである」と解釈される文) の様々な特徴を明らかにし、「真理条件」の概念を使わずに体系的に記述することを試みました。

近年は、*quoique*や*encore moins*の用例を観察し、辞書などであまり取り上げられていない意味や用法を指摘した上で、Ducrotの構築した *argumentation* や *polyphonie*などの概念を発展させながらそれらを記述するという研究を発表しました。今現在は、少量表現の日仏対照研究に取り組んでいます。

~~~~~

平塚徹 (京都産業大学)

京都産業大学の平塚徹と申します。昨年度より編集委員を務めております。また、学会の発送業務も担当しております。

かつて、フランスでアジアに詳しいと称するフランス人からベトナム人かと言われて驚いたことがありますが、最近、そのベトナムに行ったところ、ベトナム人からお前はベトナム人だと言われてしまいました。どうやら、私の容貌は南方系のようなようです。学会などでは、見分けが付きやすいのではないかと思います。

これまで、フランス語の語順を中心に特に機能主義的な観点から取り組んできました。本誌でも、第30号と第31号にコピュラ文の倒置について掲載させていただきました。その他にも、疑問詞疑問文や関係節における文体的倒置、*Il a dessiné de Jean un portrait caricatural.*のような構文に関して、論文を発表してきました。論題・掲載誌などについては、私のホームページ (<http://www.kyoto-su.ac.jp/~hiratuka/>) を御覧ください。また、白水社の雑誌『ふらんす』に、平成8年4月号から平成9年3月号まで1年間に亘って、「初級文法のなぜ? どうして?」というタイトルで、初級文法の項目について、なぜそうなっているかということ、機能主義的観点・認知言語学的観点・歴史言語学的観点から説明を試みるという連載記事を書かせていただきました。

所属は、京都産業大学外国語学部フランス語学科です。普通の語学の授業の他に、「フランス語史」、「認知言語学」、「フランス語科教育法」、挙げ句の果てには「コンピュータ基礎実習(初級)」及び「同(上級)」と、自らの能力を遼に越えた科目を担当して、苦勞しております。大学によって差はあると存じますが、大学教員はますます多様な科目を担当することが要求されてきているという時勢を実感しております。授業についても、ホームページに情報を掲載しています。ホームページには、言葉に関するエッセーも掲載していますので、お暇なときにでもアクセスして下されば嬉しく存じます。

4. 今後の例会案内

本年度5月以降の例会は以下の予定で行います。発

ページ (URLは最後のページを御覧ください) および frenchling に最新情報が掲載されますので、御確認下さい。

~~~~~

第208回例会 5月30日(金)  
独協大学6棟404号室15時 18時  
大久保朝憲 (関西大学) 「極言的発話と自明の発話」  
司会: 井元秀剛 (大阪大学)

第209回例会 6月21日(土)  
早稲田大学 第2会議室15時 18時  
伊藤達也 (パリ第10大学)  
「Bonの意味、その変容の記述」  
渡邊淳也 (玉川大学)  
「Il paraît que... と paraître について」

第210回例会 7月12日(土)  
早稲田大学15時 18時  
「感情表現をめぐる」  
川口順二 (慶應大学), 喜田浩平 (慶應大学),  
前島和也 (慶應大学)

第211回例会 9月27日(土)  
早稲田大学15時 18時  
芦野文武 「代名動詞の相互用法」(慶應大学)  
川島浩一郎 (武蔵野美術大学講師) 発表題未定

第212回例会 10月18日(土)  
早稲田大学15時 18時  
松原万容 (京都大学修士過程) 「代名動詞」  
小熊和郎 (西南学院大学) 「前置詞 par と多義性」

第213回例会 11月9日(日)  
京都, 京大会館 14時 17時  
発表者2名未定

第214回例会 12月13日(土)  
早稲田大学15時 18時  
平塚徹 (京都産業大学) 発表題未定  
阿部宏 (東北大学) 「mêmeについて」

例会発表希望者は、事務局 (または編集委員、運営委員) を通じてお申し込み下さい。 (K.M.)

#### 6. 「海外雑誌論文目録」作成について

『フランス語学研究』の巻末には、毎号、20ページほどの「海外雑誌論文目録」が掲載されております。わたし自身、ふだん使っている図書館には入っていない雑誌に載っているものでも、この「目録」があるおかげで、文献の存在を知ることができ、たいへん重宝しています。また、大雑把にでも、全体に目を通すと、過去1~2年の研究の進展状況を見わたすことができ、フランス語学の年鑑のような意味があります。この「目録」は、前号の「ニューズレター」でも少しふれるところがありましたが、毎年、会員の有志の共同作業によって編纂されているもので、毎月の例会とやらんで、われわれの学会の熱心さを体現する伝統のひとつです。『フランス語学研究』36号、37号の2回にわたって、みなさまの力を得て、わたしが「目録」作成のレ

りまとめを担当いたしましたので、ここではその作業についてご紹介いたしましょう。

毎年12月下旬、関東では早稲田大学語学教育研究所図書館、および、関西ではいくつかの大学図書館に、所蔵されている雑誌に応じて作業を分担し、前号で調査して以降の新着雑誌の目次（必要に応じて本文も）を通覧して、フランス語学の論文の著者・タイトルなどをひろいあげます。作業に加わってくださるかたがたが、それぞれその場でパソコンを用いて、目録のもととなるデータベースを作ります。早稲田では、携帯型のパソコンをもっているひとは持ち込んでそれに入力しますが、ほかに何台かそなえつけのデスクトップもありますので、それを借りることもできます。

このとき、いつも話題になるのは、「フランス語学」にかかわるものとして掲載するかどうかの判断です。そもそも「フランス語学」というわく組み自体、制度的な便宜といった側面がありますから、実際の研究には、問題の性質に応じて、截然たる画定をこばむような広がりがあります。この点で多かれ少なかれ意見がわかることはいたしかたありませんが、わたしは個人的には、フランス語の体系に密着した統辞論、意味論、語彙論といった「中核的」とみなされている領域のみならず、語用論、文体論、フランス語以外の言語との対照研究、心理言語学、社会言語学、言語学史などのひろい領域にわたっても、フランス語に関係する研究であればなるべく多く載録することが、資料的価値を高めるのではないかと考えております。（この点に関しては、ぜひご意見をお寄せください）

さて、そのようにして拾ってきたデータを、「目録」として提示しうる形にするまでには、かなりの仕事量があります。まず、ご協力くださったかたがたがそれぞれ、内容や書式を確認して、パソコン上でのデータと、ハードコピーをととのえます。パソコン上のデータは、ウインドウズとマックの違いを克服するのが従来はたいへんだったのですが、幸い、いまは Word をつかうとデータがかんたんに統一できます。Word ファイルにしたものを、とりまとめ担当者にメールの添付ファイル（またはフロッピーの郵送）で1月末までに送っていただき、さらにゴチック、イタリック、スモールキャピタルなどの指定を赤字で入れたハードコピーを同時期に郵送していただきます。担当者の手もとで、集まった原稿を雑誌名のABC順に配列し、パソコン上のデータも整序します。とりあげられる雑誌が毎回50件くらいあるため、この作業は煩雑をきわめます。2月、入試業務や年度末の雑務のあいだをぬって、少しずつ進めます。『フランス語学研究』のほかのすべての記事と同様、3月に入稿、校正を経て完成します。たいへんな仕事ではありますが、できあがるとうれしいものです。

この作業には毎年、編集委員もふくめて20人前後の会員のかたがたが手弁当で参加してくださっております。そのご協力のほどにはいつも頭のさがる思いですが、しかし意外と、単なる機械的作業ではなく、また、単なる労苦でもありません。必然的に、いろいろな最新の研究を目にする機会でもあり、ふだんはあまり見ることのできない、「めずらしい雑誌」に目を通すことにもなります。作業の過程で、思わぬ発見をすることもあります。また、これほど多くの研究がなされて

を進めようという刺激にもなります。そのようなこともあり、わたしは、大学院生など若い研究者のかたがたも、この共同作業にくわってくださるよう、呼びかけたいと思います。関心のおありのかたは、ぜひお近くの編集委員までお問い合わせください。

（渡邊淳也）

## 7. ドイツ語の雑誌論文

毎年年末に行なう共同作業として、数人の語学会仲間と海外雑誌目録の作成がある。私の勤めていた早稲田大学語学教育研究所図書室で予定された雑誌の目次を調べあげるが、私を除き、皆パソコンで打ち込むので能率は良い。が、5時間程の集中作業のあと、すこし肩が凝るといふものもいる。全員フォーマットに慣れ、リストは順調に仕上がっていくが、ふと気になることが脳裏をかすめる。ドイツ語の雑誌論文は心して十分に拾われているだろうか。また、後に我々のうち何人のひとに利用されるだろうか。他事ならず私自身ずっと気になったことであって、たとえば

Romanistisches Jahrbuchを開くと、若干のドイツ語論文のほか、毎号夥しい書評が掲載されている。

Zeitschrift für französische Sprache und Literatur,

Zeitschrift für romanische Philologieなどについても同断である。これら3誌に収められた短いが実に豊富なフランス言語学論文の紹介・書評はドイツ人研究者の便宜のためだろうが、我々日本人も日本語でこのように広範な情報提供の恩恵に浴していたならばと羨ましく思う。ところで短い論評は別としてもドイツ語で書かれた論文を読解しようとするとき、我々自身がなんとかドイツ語をこなしていれば問題ないが、さもなければ、どなたかドイツ語の読める言語学者の助力を得られないものだろうか。1960年以降数巻に及ぶ冠詞論をものにし、英語、フランス語も射程に入れていたドイツ語学者関口存男のことがふと思ひ浮かべられる。生成文法や認知言語学に足を踏み入れた研究分野で英語が必要な際は手が伸びやすいが、フランス古語、中世語研究の分野同様、伝統的にドイツ人研究者が少なくないと思われるフランス言語学において、かれらがフランス語で発表してくれるならよいが、ドイツで出版される研究誌にドイツ語で発表されても我々としては文句がつけられない。

もっとも書評を除けば、ドイツ語で書かれた論文はやたらにあるわけではない。本誌の海外雑誌目録で拾われている範囲では、毎号3、4、多くて7、8点である。試しにLa Grammaire critique de la langue française(M. Wilmet)の参考文献目録でもおおよそ750点のうち、14点がドイツ語で決して多くはない。また分野でいっても、語史、ロマンス語との関連、語彙論、テキスト文法、文法用語論などに今のところ限られてはいるが、ドイツ語文献から直接の紹介、論考としては古く川本茂雄氏によるEugen Lerchによる半過去論(フランス語研究4, 1952, pp.7-12)があったり、時制、叙法の研究で見逃せぬ論考がある可能性はある。今も活躍するHarald Weinrichのように、『時制論』、『言語とテキスト』(紀伊国屋書店刊)のように訳書で入手できるものは心強く思うわけである。

ドイツ語では不便している私の夢のまた夢を語らせて頂き、なかなか厳しい要望とは思いますが将来に向けての展望として述べさせてほしい。

～ ～ ～ ～ ～付 記 ～ ～ ～ ～ ～

ドイツ語文献の重要性を会津先生に指摘していただきました。「海外雑誌文献情報目録」では、使用言語にかかわらず短い書評は原則として拾わないことにしていますが、それはこの項目が膨大になってしまうからです。しかし3ページもの書評になると、これは本誌の「論評」に当たる内容になりますから、たとえ書評欄にあるものでも「目録」に拾うことがあります。

ただし、ドイツ語での書評を「目録」に掲載してもドイツ語を解読できなければ役に立ちません。中世語やロマンス語学を専門になさる方は一般にドイツ語文献を活用されますが、現代語のみを扱う研究者はその限りではないようです。周りにいるドイツ語ができる人に翻訳や要約をお願いするという手もありますが、おのずから限られてしまいます。「新刊紹介」、「論評」、「展望」などの項目で、ドイツ語の論文の日本語での直接の紹介・議論は最も望ましい形式ですから、雑誌への投稿をお願いしたいと思います。

なおMax Niemeyer社のLexikon der romanistischen Linguistikは1990年に巻V・1の『フランス語』(894p)が、また2001年には巻I・1の『ロマンス語学の研究史と方法論』(1053p)が刊行されていて、主な研究分野における研究の現状と諸言語の文献が紹介されています。この2冊の使用言語は主にドイツ語とフランス語ですが、書籍だけでなく雑誌論文などへの言及も数多くあり役に立ちます。(川口記)

## 8. 大学院紹介：西南学院大学大学院

西南学院における大学の開設は1949年、文学部に英語専攻とフランス語専攻からなる外国語学科が増設されたのは1965年、文学研究科としての大学院発足は1976年である。現在、文学研究科は英文学・フランス文学・国際文化の3つの専攻コースに別れている。

フランス語学の授業科目は博士前期(修士)課程にフランス語学特殊研究とフランス語学演習、後期課程にフランス語学研究指導があり、小熊和郎と西村牧夫が担当している。小熊は「フランス語学、日仏対照、バスク語学」、西村は「フランス語統辞論、日仏口語比較、語りの構造」が研究テーマである。このほか毎年必ずfrancophoneによる授業を開講しており、このところ福岡でattaché de Coopérationを務める Yves Cadiou(一般言語学博士)が担当している。

ちなみに、2002年度の講義内容は小熊が「フランス語学にどのような問題があり、どのようなアプローチが可能かを、基本文献や関連する内外の文献を通して広く考察していく。また、レトリックのメカニズムと論証法に関する指導も行う」、西村が「Grammaire méthodiqueとGrammaire critiqueの記述を比較検討し、フランス語限定辞および時制の全体構造を探る」であった。また、Cadiouは文学テキストを語彙・文法・文体の観点から考察している。

語学を専修する者は以上の科目のほかにフランス文学の授業を選択することによって課程修了に必要な単位を満たす必要があるが、ほかの専攻科の科目で補うこともできる。たとえば、英語学の担当は川瀬義清と藤本滋之で、前者は意味論・認知文法論を専門とし認知的側面から見た言語研究がテーマ、後者は統語論・意味論を専門とし普遍文法の追求がテーマである。また、いわゆる語学ではないが、アメリカ流のコミュニ

ケーション部門が充実していることも本学文学研究科の特徴と言えるであろう。

国際文化専攻にはドイツ語や中国語が含まれるが、残念ながら現在までのところ語学に関する実績はない。今後の充実が望まれるところである。フランス語学に関しては近い将来2人のフランス人研究者が大学院担当の資格を得る見込みで、さらなる発展が期待されている。(西村牧夫)

## 9. 研究会のお知らせ

「フランス言語学を一緒に勉強する会」

早いもので、勉強会が発足してから今年で11年目になります。勉強会を始めた当初は、3時間という発表時間はちょっと長すぎるのではないかと懸念していました。

30分とか1時間とかが普通の学会発表の時間と比べると、3時間という時間はあまりに長く、話すネタがなくなってしまうのではないかと、場がもたなくなるのではないかと心配したものです。

しかし実際に始めてみると、この時間の長さが勉強会の面白さを支えているのだということを実感するようになりました。短い発表時間では発表者は「完成品」を手際よく提示することに心を砕き、聴衆は提示された「完成品」の品定めをするというような関係になりがちです。しかし勉強会のようにゆったりと流れる時間の中では、発表者は完成品ができあがる前の段階を参加者と共に歩むということが可能になります。具体的に言えば、発表者が話している途中であっても、分からないことがあれば参加者はその場で遮って質問するということがよくあります。あるデータに関して、発表者の解釈とは異なった視点からの解釈が出されることもあります。一つの研究の結論・仮説を出す前には沢山の脇道・小道があるものです。それを発表者も参加者も共に辿っていくことはとても有益なことですし、それ以上に楽しいことだと思います。料理ができる前に味見をしたり、つまみ食いをするのは、時として本番の食事以上においしかったり楽しかったりするものですが、ちょうどそれと同じことかもしれません。

最後に参加者全員に意見を言ってもらおうということも勉強会の大きな魅力です。各人各様の視点を持っているということの豊かさ、貴重さを実感する一時です。私はこのところずっと時制のことをやってきて、時制の問題しか考えないことが多いのですが、思ってもみなかったところで(たとえば限定詞や前置詞の視点から)時制の問題に光を当てられて驚くことがよくあります。ある問題の渦中に居ると全体を見渡す余裕を失ってしまう私にとって、様々な視点からの感想を聞くのは刺激的な喜びです。

このように有意義な勉強会に是非皆さんも参加して、研究のプロセスを共に辿っていく楽しみを味わっていただきたいと思います。(大久保伸子)

今年度は4月から次のような発表が行われ、または予定されています。

4月26日(土)3時～6時

慶応大学(三田)大学院棟4F 347b 教室

藤田知子(神田外語大学)「le moindre再考」

5月17日(土) 3時～6時  
慶応大学(三田)大学院棟4F 347b 教室  
喜田浩平(慶応義塾大学)「少量表現の日仏対照：  
「まれにみる」研究」

6月28日(土) 3時～6時  
慶応大学(三田)大学院棟4F 347b 教室  
大久保伸子(茨城大学)「場面転換と半過去」

7月19日(土) 3時～6時  
慶応大学(三田)大学院棟4F 347b 教室  
芦野文武(慶應義塾大学博士課程)  
「代名動詞の相互用法について」

この会で話して下さる方を募集しています。ご希望の方は世話人までご連絡下さい。またこの会で読み合わせをしたい本や論文、その他のご提案もぜひお寄せ下さい。なお昨年度から案内はメーリングリスト Frenchlingでのみ行い、郵送による通知は省かさせていただきますことになりました。Frenchlingに加入しておられない方は以下のアドレスのいずれかにお知らせいただければ、個人宛にメールでご案内します。

fujita アットマーク kanda.kuis.ac.jp, jnkawa アットマーク attglobal.net,  
okubo アットマーク mx.ibaraki.ac.jp  
(世話人 藤田知子, 川口順二, 大久保伸子)  
~ ~ ~ ~ ~

#### 関西フランス語研究会

毎月1回大阪日仏センターで、関西の大学院生と教員が中心になって研究会を開いています。気楽な会で、すので言語学に興味のある方でしたらどなたでもいらしてください。最近では次のような発表がありました。

11月例会  
清水光晴「フランス語の<rester+過去分詞>について」

12月例会  
安達博明「< cela faire P que Q > について」

1月例会  
曾我祐典「認知動詞・伝達動詞をめぐるいくつかの問題」

2月例会  
松原万容「se faire / se laisser+INF 構文について」

3月例会  
出口優木「Sloppy identity (不完全同一性) について」

これからも、関西の方の情報交換の場としてみなさんのお役に立ちたいと思っています。ここしばらく、語学会の例会のような発表が続いていますが、新刊書や論文の紹介、国内外の新しい研究の動向についての紹介や解説なども大歓迎です。発表を希望される方は木内か福島までご連絡ください(関西の方に限らずどなたでもどうぞ)。

木内: kinouchi アットマーク osaka-gaidai.ac.jp  
福島: fukushim アットマーク lit.osaka-cu.ac.jp

#### 編集後記

ニューズレターの編集を2年間担当してきましたが

2003年度に『フランス語学研究』38号の編集責任の任につくことが決まり、これに伴ってニューズレターの方は藤田知子さんが受け持ってくださいることになりました。2回の編集でご協力いただいた方々に深く感謝いたします。

編集にあたって目標の一つは、学会員の方々に他の学会員や編集委員をより身近に感じていただくということでした。学術論文を読むとき、著者を知っていたので理解がより深まったという経験をなされた方も多いと思います。東京や京都などでの語学会例会、フランス語学研究会、フランス語談話会などに出席することで交流ができますが、必ずしも多くの学会員と直接に話をする機会が持てるとは限りません。またフランス語学会は近年若い研究者の参加が増加していて、4月の語学会例会の後、木下光一先生が「知らない顔がずいぶん増えたなあ」と感慨深げにおっしゃっていました。これは喜ばしい限りなわけですが、同時にお互いをより良く知る必要がますます増えていることをも意味します。ニューズレターがこの点少しでもお役に立てたならと思う次第です。

編集委員会では役職を可能な限り分散しているのですが、今年は事務局(3年間:喜田・前島・川口)、運営(残り1年:前島)そして編集責任(1年間川口)という3つの役目がすべて慶應義塾大学に集まることになりました。以前大阪大学でも事務局と編集責任が重なったことがあります。これは1年間に亘る負担の集中、そして他の人にチェックされることで簡単に修復できるはずの間違いが残存して被害が広がる可能性という欠点がある一方、事務や連絡がより効果的になるという利点も生じます。利点はできるだけ生かして事務・例会運営・編集などにあたって行きたいと思いますが、欠点については会員の方々のご理解・ご協力なくしては改善を見込むことができません。どのようなことでもお気づきの点などあれば是非ご意見を寄せいただきたいと思っておりますので、お願いいたします。

最後になりましたが、3年のあいだ事務局を担当して的確かつ効果的な事務運営をして下さった大阪大学の春木、三藤、井元の各先生にお礼を述べさせていただきます。長いこと有難うございました。(川口順二)

#### 日本フランス語学会のホームページ

<http://lapin.ic.h.kyoto-u.ac.jp/belf/ho>

#### メーリングリスト frenchlingの加入申し込み先

f-ling-ad アットマーク french.lang.osaka-u.ac.jp